

春秋繁露通解並びに義証通読稿一 (一)

卷一 楚莊王篇第一 (第五節)

近 藤 則 之

序

本稿は、「春秋繁露通解並びに義証通読稿一」(一)〔佐賀大國文二一・九二年一月〕の続編である。書式・凡例はすべて前稿に従うので、重複を避ける。なお、本稿の続編「春秋繁露通解並びに義証通読稿二」卷一玉杯第二を、「佐賀大学教育学部研究論文集第四一集第一号 (I)」(九四年一月刊行予定)に発表の予定である。

【第五節】

〈本文〉 春秋の道は

〈義証〉 ○天啓本、行を提げず。

〈本文〉 天を奉じて古へに法る。是の故に巧手有りと雖も、規矩に循(本「修」に作る。下の『義証』によって「循」に改める)はざれば、方員を正す能はず。

〈義証〉 管子（管子） 法法篇に、「巧者は規矩を廢して方員を正す能はず。聖人は法を廢して國を治むる能はず」と。（淮南子）に、「規なる者は万物を員にする所以なり。矩なる者は万物を方にする所以なり」と。「修」当に「循」に作るべし。

〈本文〉 察耳有りと雖も、六律を吹かざれば、五音を定むる能はず。

〈義証〉 六律は、陽律なり、太簇・姑洗・蕤賓・夷則・無射・黃鐘なり。五音は宮・商・角・徵・羽なり。

〈本文〉 知心有りと雖も、先王を覽ざれば、天下を平かにする能はず。

〈義証〉 ○「知」読んで「智」。官本に云ふ、「〔覽〕、他本『覺』に作る」と。

〈本文〉 然れば、則ち先王の道を遺す、

〔義証〕 凌云、「遺留するの道なり」と。（凌曙『春秋繁露』注）

〔本文〕 亦天下の規矩・六律のみ。

〔義証〕 義、孟子に本づく。

〔本文〕 故に聖者は天に法り、賢者は聖に法る。此れ其の大数なり。大数を得て治まり、大数を失ひて乱る。此れ治乱の分なり。聞く所天下に二道無し。故に聖人、治を異にするも而かも理を同じうするなり。

〔義証〕 「聞く所」とは之れを師に聞くを謂ふ。漢世、經を治めて最も師説を重んず。蓋し古道の遺なり。『荀子』大略篇に、謂ひて師を称せざる、之れを畔と謂ひ、教へて師を称せざる、之れを倍と謂ふ。倍畔の人は、名君朝に入れず、士大夫之れに塗に遇はば、与に語らず」と。其の嚴なること此くの如し。董子の対冊に謂ふ（以後「対冊に云ふ」と称す）、「臣愚不肖、聞く所を述べ、学ぶ所を誦し、師の言を道ひて、座かに能く失すること勿きのみ」と。漢世の選舉に出入聞く所に悖らざるの目有り。其の偶々師説に背く者有れば、則ち学を承くるの士、相与に詆諆す。而れども大師に仮託して以て自ら異を尊ぶ者も亦多し。又師説を變異するに因りて太常に立つを得る者有り。嚴・顔の春秋はこれのみ。然れども時の傳師の説に仍（よ）りて以て自ら固くす。楊雄の『法言』寡見篇、之れを譏りて曰く、「譏諂の学、各々其の師に習ふ」と。班固、亦其の習ふ所に安んじて、見ざる所を毀り、終に以て自ら蔽はるるを以て、学者の大患と

爲す。西漢の末造、稍稍として詛難す。東漢の初めに逮び、博士の弟子、家法を修めずして、私かに相容隠して師に違ふを以て義に非ずと爲し、意説して理を得たりと爲す。徐防、以て深慮を爲し、上疏して言を切にして謂ふ、「宜しく薄を改めて忠に従ふべし」（『後漢書』卷四本伝）と。想見す可し、風尚推移の漸を。本書「僉序篇」に引く所の師説に、子夏・閔子・公肩子・曾子・子石・世子・子池の倫有り。『公羊疏』に謂ふ、「胡母生、公羊經伝を以て董氏に伝授す」と（何休序の徐疏に見ゆ）。然れども考ふるに、『漢書』儒林伝に、「胡母生、公羊春秋を治めて景帝の博士と爲る。仲舒と業を同じくす。仲舒、書を著し、其の徳を称せらる。年老ひ、歸りて斉に教へ、斉の春秋を言ふ者、之れに宗事す。公孫弘も亦頗る焉を受く」と。是れ仲舒、但胡母と業を同じくするのみ。師弟には非ざるなり。徐説誤てり。而して今書の中に、又胡母生の文無し、殘佚多きを知る。

〔本文〕 古今は通達す。故に先賢、其の法を後生に伝ふ。

〔義証〕 『韓詩外伝』に、「夫れ人を詐る者曰く、『古今、情を異にす。其の治乱する所以は、道を異にすればなり。而して衆人は皆愚にして知無く、陋にして度無き者なり。其の見る所に於いて猶ほ欺く可きなり。況や千歳の後をや。聖人は己を以て度る者なり。心を以て心を度り、情を以て情を度り、類を以て類を度る、古今一なり。類、悖らざれば、久しと雖も、理を同じくす。故に理に縁りて迷はざるなり。夫れ五帝の前、人を伝ふる無し。賢人無きに非ず、久しきの故なり。五帝の中、政を伝ふる無し。善政無きに非ず、久しき

の故なり。虞夏、政を伝ふる有るも、殷周の察なるに如かず。善政無きに非ず、久しきの故なり。夫れ伝なる者は久しければ則ち愈々略なり、近ければ愈々詳かなり、略なれば則ち大を挙げ、詳かなれば細を挙げ。故に愚者、其の大を聞きて、其の細を知らず、其の細を聞きて、其の大を知らず、是を以て久しくして差ふ。三王五帝は政の至りなり。『詩』(商頌・長髮)に曰く、「帝命、違はず、湯に至りて斉し、古今一なり」と。『荀子』非相篇大同なり。

〔本文〕春秋の世事に於けるや、古に復るを善とし、常を易ふるを譏る。其の先王に法るを欲するなり。

〔義証〕宣公十五年伝に、「上は古を變じ常を易ふ。是れに應じて天災有り」と。昭五年伝に、「中軍を舍くとは、何ぞや。古に復るなり」と。僖二十年新たに南門を作る。伝に、「譏れり。何をか譏る。門に古常有るなり」と。案ずるに、董子、治を言へば、古に法るを重んず。其の対冊に云ふ、「春秋、古を變ずれば、則ち之れを譏る」と。漢世の儒者其の説に従ふこと多し。賈禹の疏に、「衰を承け乱を救ひ、矯めて古化に復ること陛下に在り。臣愚以為へらく、尽く太古の如くするは難し、宜しく少しく古に放(なら)ひて、以て自ら節すべし」と。禹は董子の再伝の弟子なり。孟子は「先王に法る」と言ひ、荀子は「後王に法る」と言ふ。荀子は周末に生まる。又其の時老莊盛行し、高く皇古を語る。故に文武を以て後王と為す。儒效篇に亦先王を称する者有り。董子は秦の後を承く。故に後王に法ると言はず。春秋、文王の法を尊ぶ、則ち仍ほ周に法り、荀に同じ。

〔本文〕然而れども介するに一言を以てして曰く、「王者は必ず制を改む」と。

〔義証〕此れ相伝の旧説なり。武帝、仲舒に冊して云ふ、「蓋し聞く、五帝・三王の道は、制を改め、樂を作りて天下治和す。百王之れを同じくす」と。『荀子』正論篇に、「唯其の朝を徙し制を改むるを難しと為すのみ」と。楊注に謂ふ、「徽号を殊にし制度を異にするなり」と。『白虎通』封禪篇に、「始めて命を受くるの日、制を改めて天に應ず。天下太平にして功成り、封禪して以て天に告ぐ」と。『風俗通』山沢篇に、「王者命を受け姓を易へ、制を改めて天に應ず」と。並んで制を改むるを以て王者に属す。其の文甚だ明らかなり。其の事は則ち正朔服色の類なり。惟春秋緯に云ふ、「春秋を作りて以て乱制を改む」と(公羊序の疏亦此の語を引く)。是れより遂に改制を以て孔子の春秋に属する者有り。然れども「乱制を改む」と云ふは、是れ末流の失を改むることにして、王者の改制の謂ひに非ざるなり。董子の所謂る義を立つと爾云ふものなり(王道篇に見ゆ)。問ふ者曰く、本書の三代改制篇、明らかに春秋を以て一代と為し、周の制を變ずるは、則ち何ぞや、と。曰く、此れ蓋し漢初の師説の云ふ所なり。「黒統を正す」「二王を存す」「三代改制質文篇」云々は皆王者即位して制を改め天に應ずるの事にして、春秋に託して以て時の主を諷するなり。対冊に云ふ、「春秋、命を受けて先に制する所の者は、正朔を改め、服色を易ふることなり。天に應ずる所以なり」と。意、見る可し。蓋し漢、天下を有ちて秦正を沿用す。服色・礼樂に至つては、並んで苟簡に安んず。賈誼、文帝の時に在りて、即ち正朔を改め服色制度を易へ、官名を定め礼樂を興すを以て言を為

し、草して其の儀法を具かにす。色は黄を尚び、数は五を用ふ。文帝未だ更定するに皇（いとま）有らず。其の後司馬相如、子虛の賦を作り、且つ是れを以て諷諫す。司馬遷は董生に学ぶ者なり。亦、厯紀壞廢するに、漢興つて未だ正朔を改めず。宜しく改むべきを言ふ。事は『漢（書）』『児寛伝』に見ゆ。武帝の太初元年始めて諸人の説を採り、厯を正し、正月を以て歳首と爲し、色は黄を尚び、数は五を用ふ。董子の此の書、太初の前に作らる。蓋し漢初の儒者の通論にして董の創（創）説に非ず。故に余以爲へらく、董子、若し太初の後に生まるれば、或ひは斷斷たらざらん、と。是に於いて歐陽修、其の正朔を改むるに惑ひ、殆ど未だ深く其の時を究めず、後人此れに因りて動もすれば、改制を言ひて、則ち愈々謬るを譏る。隠元年注に云ふ、「其の義を王者に通ずる所以は、惟王者にして然る後に元を改め号を立つ」と、是れなり。而れども隠二年注に云ふ、「春秋周を改め命を變ふるの制有り。孔子、時を畏れ害を遠ざく。又、秦の將に『詩』『書』を燔かんとするを知り、其の説口授して相伝へて、漢に至り、公羊氏及び弟子胡毋生等乃ち始めて竹帛に著す」と。遂に誕説の祖とする所と爲る。文、『公羊』に見えざるを以て誣ふるなり。董子、此の文を知らざるに及んでは、固より甚だ明らかなり。妄者、王者は即ち孔子なりと謂ふに至りては、謬てること弁ずるに足らず。（義、互ひに三代改制篇に見ゆ。）俞（樾）云ふ、「襄三十一年、『左伝』に、『大国に介す』と。杜注に曰く、『介は、猶ほ間のごとし』と。故に古語、間介を以て文を連ぬ。『孟子』『尽心篇』に、『山徑の蹊の間介』と。『文選』『長笛の賦』に、『間介、蹊無し』と。即ち『孟子』の文を用ふ、是れなり。『介するに一言を以てす』とは、猶ほ『間するに一言を以てす』のごとし。蓋し春秋の世事に於ける、

古に復るを善しとし、常を變ふるを譏る。其の先王に法るを欲す。而れども或ひと且に一言を出だして以て之れに介せんとして、曰く、『王者は必ず制を改む』と。此の『介』の字は即ち『吾、間然する無し』の『間』にして、玉杯篇の『此れ間する所なり』は、即ち此の『介』の字の義なり（『諸子平義』卷二五）と。余案するに、『潜夫論』『明闇篇』に、『是を以て当塗の人、恒に正直の士を嫉み、一介の言を君に得て以て其の邪を矯むるなり』と。亦「介」を以て「間」と爲す。

〈本文〉自ら僻する者此れを得て以て辞して曰く、「古より、苟しくも先王の道に循ふ可くんば、何ぞ相因る莫き。」

〈義証〉「古」の下八字を一句と爲す。謂ふ、自ら僻する者、王者の制を改むるに借りて詞を爲して、「古、苟しくも以て先王の道に循用す可くんば、何ぞ並んで度を制して之れに因る莫き」と言ふを。謂ふところは、道も亦變ず可きなり。殆ど、其の時の博士の春秋雜説を習ふ者に此の議有るか。王安石の「太古篇」に云ふ、「太古の道果たして之れを万世に行ふべくんば、聖人悪くんぞ制作を其の間に行はんや」と。亦道と制とを潤（みだ）して之れを一にす。此の語と、意、正に同じ。

〈本文〉世、是れに迷ひ、聞きて以て正道を疑ひて、邪言を信ず。甚だ患ふ可きなり。

〈義証〉道を改むるを以て邪言と爲す。董生の患ひ深し。後世、猶

ほ其の辞に仮りて以て乱を致す者有り。

〔本文〕之れに答へて曰く、人に、諸侯の君は狸首の衆に射ると聞
く者有り。

〔義証〕大射儀に、「衆正、位に反り、狸首を奏して以て射る」と。
鄭云ふ、「狸首は、逸詩の曾孫なり」と。狸の言、「来たらず」なり。

〔本文〕是に於いて自ら狸首を断ち、縣けて之れを射て曰く、安く
んぞ衆に在らんや、と。此れ名を聞いて其の実を知らざる者なり。

〔義証〕名を聞いて実を知らず、貿然として之れを行ふ。其の極み
は以て天下を亡ぼすに足る。

〔本文〕今所謂の新王は必ず制を改むる者とは、其の道を改むるに
非ず、其の理を改むるに非ず、命を天に受け、姓を易へ王を更むる
なり。前王を繼いで王たるには非ざるなり。若し一ら前制に因り故
業に循ひて（本、「修」に作る。義証に拠りて改む）改むる所有るこ
と無ければ、是れ前王を繼いで王たる者と以て別つ無し。

〔義証〕「修」当に「循」に作るべし。『白虎通』三正篇に曰く、「王
者、命を受け、必ず朔を改むるは何ぞ。姓を易ふるを明らかにして、
相襲がざるを示し、之れを天に受け、之れを人に受けざるを明らか
にす。民心を變易し其の耳目を革めて以て化を助くる所以なり。故
に『大伝』に曰く、「王者始めて起てば、正朔を改め、服色を易へ微

号を殊にし、器械を異にし、衣服を別かつなり。是を以て禹舜太平
を繼ぐと雖も、猶ほ宜しく改めて以て天に應ず可し。又『白虎通』
号篇に、「王者、命を受くれば、必ず天下の美号を立てて以て功を表
し、自ら明らかに姓を易ふるを見て子孫の制と爲すなり。夏殷周
は、天下の大号を有するなり。百王、天下を同じくして、以て別つ
無し。天子の大礼を改正して、号して以て自ら前に別つ。己の功業
を表著する所以なり。必ず号を改むるは、天命已に著らかに己を天
下に顕揚せんと欲するを顯らかにする所以なり。己復た先王の号を
襲はば、体を繼ぎ文を守るの君と以て異なる無きなり。不顯、不明
は天意に非ざるなり。故に受命の王は、必ず天下の美号を挾びて、
己の功業を表著して、致施に当たたるを明らかにす」と、是れなり。

所以に預め自ら前に表見するなり。又云ふ、「春秋伝に曰く、『王者
命を受けて王たれば、必ず天下の美号を挾んで、以て自ら号するな
り』」と。隱元年何注に、「王者命を受くれば、必ず居処を徙し、正
朔を改め、服色を易へ、徽号を殊にし、犠牲を變じ、器械を異にし
て、之れを天に受け、之れを人に受けざるを明らかにす」と。『孔叢
子』雜訓篇に、「縣子、子思に問ひて曰く、『顔回、邦を爲むるを問
ふに、夫子曰く、『夏の時を行ふ』』と。此くの若くんば、殷周の正を
異にするは非と爲すか』と。子思曰く、『夏の数は天を得たり。堯舜
の同じくする所なり。殷周の王は征伐、革命して以て天に應じ、因
りて正朔を改正す。天の時を之れ改むと云ふが若きのみ。故に相因
らざるなり。夫れ禪を人に受くる者は、則ち其の統を襲ふ。命を天
に受くる者は、則ち之れを改む。其の事を神にすること、天道の變
の如く然る所以なり。以へらく三統の義、夏其の正を得たり。是を
以て夫子云へり』」と。『通典』五十五「元命包」を引きて云ふ、

「古、姓を易へて王たれば、相襲はざるを示して、之れを天に受くるを明らかにするなり」と。輿案するに、正朔・服色・数は天子の大礼たり。姓を易へて命を受くれば、必ず顯らかに一二を揚げて、以て民の耳目を新たにす。変更を守成の代に議するが若きは、則ち治の体を識らざるなり。『晋書』輿服志に、「高堂隆奏して言ふ、正朔を改め徽号を殊にするは、帝王の其の政を神明にし、民の耳目を變ずる所以なり」と。深く其の旨を得たり。

〈本文〉受命の君は、天の大きいに顯す所なり。父に事ふる者は意を受け、君に事ふる者は志を儀（あら）はす。

〈義証〉「儀」は猶ほ「表」のごとし。君の志を表すを謂ふ。

〈本文〉天に事ふるも亦然り。今、天大いに己を顯はす。物、代はる所を襲ひて率（おほむ）ね与に同じくすれば、

〈義証〉俞云ふ、「己」の字もて句を絶つ。『物』は当に『勿』と為すべし。『尚書』立政篇に、「時は則ち之れを問すること有る勿かれ」と。『論衡』譴告篇に、『物』を『勿』に作る。『莊子』天道篇に「中心物愷（中心より愷（たの）しむなし）」と。『積文』に、『物』本亦勿に作る。是れ古字通ず」と。此れ、上文の「受命の君は天の大きいに顯はす所」を受けて言ふ。天、既に大いに己を代はる所の国に顯す、本相襲はざるのみ。制を改むる能はずして、大率（おほよそ）与に同じくするは、天意に非ざるを謂ふ」（『諸子平義』卷二五）と。輿案するに、「俞の説は是なるも、字を改むるは非なり。『周語』に、

「姓を改め、物を改む」と。韋注に、「物を改む」とは、正朔を改め服色を易ふるなり」と。『物』とは即ち正朔服色の謂ひなり。下文に、「物改まりて天の授くること顯らかなり」と。此の「物」の字を承けて之れを言ふ。此れ言ふところは、物を改めずして率ね代はる所の国と同じくするなり。

〈本文〉則ち不顯不明は天の志に非ず、故に必ず居処を徙して、更めて号を称して、正朔を改め、服色を易ふるは他無し、敢へて天の志に順ひて自ら顯るるを明らかせずんばあらざるなり。

〈義証〉『礼記』正義に云ふ、「鄭康成の義には、古より以来皆正朔を改む。孔安国の若きは、則ち正朔を改むるは殷周二代なり。故に『尚書』に注す、「湯、正を改め服を易ふ、是れ湯より始めて正朔を改むるなり」と。案するに、鄭の義、董と同じ。

〈本文〉夫の大綱・人倫・道理・政治・教化・習俗・文義は尽く故の如くす、亦何ぞ改めんや。

〈義証〉制度の改む可きを申べて以て道理の決して改む可からざるを明らかにす。『礼』大伝に云ふ、「得て変革す可からざる者は、親を親とする、尊を尊とする、長を長とする、男女の別有るなり」と。董子復た政教・習俗・文義・を推広し、後世の口を藉りて古を蔑るを防ぐ所以の者、周し。『文義』は文字・訓故なり。

〈本文〉故に王者政を改むるの名有るも、道を易ふるの実無し。

《義証》『塩鉄論』尊道篇に、「文学曰く、師曠の五音を調するや、宮・商を失せず、聖王の世を治むるや、仁・義を離れず。故に制を改むるの名有るも、道を変ふるの実無し。上は黄帝より、下は三王に至るまで、徳教を明らかにし、庠序を謹み、仁義を崇び、教化を立てざる莫し。殷周は因修して昌んに、秦王は法を変じて亡ぶ。

『詩』に云ふ、『老成の人無しと雖も、尚ほ典型有り』と。『韓詩外伝』に、「君子の道に於けるや、猶ほ農夫の耕のごとし。年（みのり）の優を獲ずと雖も、以て易ふる無きなり」と。『白虎通』三正篇に、「王者、道を改むるの文有るも、道を改むるの実無し。君の南面、臣の北面、皮弁・素積・声味の変ず可からず、哀惜の改む可からざるが如きは、百王不易の道なり」と。案するに、『白虎通』爵篇も亦、「王者道を改むるの文有り」に作る。疑ふらくは、本（もと）「改制」に作るも、後人、下文に沿ひて誤つて之れを改めしならん。

《本文》孔子曰く、無為にして治る者は、其れ舜か、と。其の堯の道を主とするを言ふのみ。此れ不易の效に非ざるか。

《義証》対冊に云ふ、「孔子曰く、『為す亡くして治まる者は舜か』と。正朔を改め、服色を変へて以て天命に順ふのみ。其の余は尽く堯舜に循ふ。何ぞ更に為さんや。故に王者、制を改むるの有るも、道を変ずるの實亡し」と。案するに、堯の道に循ふ以て無為と為す亦今文家の説なり。『白虎通』三教篇に、「舜の堯を受くるや、易ふるを為す無きなり」と。○官本に云ふ、『治』他本『制』に作る。誤てり」と。

《本文》問ふ者曰く、物改まりて天授くること顯らかなり。

《義証》○盧云ふ、『授』別本『受』に作る。今は何本に従ふ」と。與案するに、天啓本「授」に作る。凌本同じ。

《本文》其の必ず更めて樂を作るは何ぞや、と。曰く、樂は是れに異なる。制は天に應じて之れを改むと為すも、樂は人に應じて之れを作ると為す。

《義証》仁義礼樂は改制の中に在らず。武帝の冊に、「制を改め、樂を作る」と。亦是れ分けて言ふ。孔子、顔淵に告げし夏の時・周の晁殷の輅は、改制の事なり。韶舞は作樂の事なり（『論語』衛靈公篇）。

《本文》彼の命を受くる所の者は、必ず民の同じく樂しむ所なり。

《義証》○盧云ふ、『受』旧本『授』に作る。訛れり」と。與案するに、天啓本「授」に作る。亦通ず。下の「之」の字無し。

《本文》是の故に大いに制を初めに改むるは、天命を明らかにする所以なり。更たに樂を終はりに作るは、天功を見はす所以なり。

《義証》更たに樂を終はりに作りて、其の初めより相沿ふを明らかにするなり。対冊に云ふ、「王者未だ樂を作らざるの時は、迺ち先王

の樂の世に宜しき者を用ひて、以て深く教化を民に入る。教化の情得ざれば、雅頌の樂成らず。故に王者功成り、樂を作り、其の徳を樂しむなり。樂は民風を變じ民俗を化する所以なり。其の民を變ずるや易し、故に其の人を化するや著かなり。故に声、和に発して、情に本づき、肌膚に接して骨髓に藏す」と。『漢書』禮樂志に、「王者未だ樂を作らざるの時は、先王の樂に因りて以て百姓を教化して、其の俗を説樂せしめ、然る後に改作して以て功德を章かにす」と。

『白虎通』禮樂篇に、「王者始めて起つに、何を用て民を正す。以為へらく、且く先代の禮樂を用ひ、天下太平にして、更たに制作す。『書』に曰く、『肇め殷の禮を稱して新邑に祀る』と。此れ太平にして殷の禮を去ると言ふ。春秋伝に曰く『曷為れぞ近きを修めずして遠きを修むる。己に同じければ、因る可し。先に太平を以てし、必ず復た制を更たむるは、襲はざるを示すなり。又天下之れを樂しむは、樂の徳を象り功を表して、名を殊にする所以なればなり』と。

昭二十五年何注に、「周の、夏の樂を舞ふ所以の者は、王者始めて起ち、未だ制作せざるの時、先王の樂の己と同じき者を取りて、仮りて以て天下を風化す。天下大いに同ずれば、乃ち自ら樂を作る。夏の樂を取るは、周と文を同じくすればなり。王者は六樂を宗廟の中に舞はす。先王の樂を舞はすは、法有るを明らかにするなり。己の樂を舞はすは、則有るを明らかにするなり。四夷の樂を舞はすは、徳広くして之れに及ぶを大いにするなり」と。『白虎通』大同なり。

〈本文〉 天下の新たに樂しむ所に縁りて之れが文曲を為り、

〈義証〉○『後漢書』祭祀志注に、「東平の蒼王の議に、元命包を引

いて云ふ、『然れども天地の雜々樂しむ所、之れが文典を為す』と。疑ふらくは、彼の文誤れり。

〈本文〉 且つ以て政を和し、且つ以て徳を興す。天下未だ偏く合和せざれば、王者虚しく作らず。樂は内に満ちて動きて外に発する者なり。

〈義証〉『樂記篇』に、「其の自ら生ずる所を樂しむ」と。又曰く、「樂は、心の動なり」と。『毛詩』周頌譜の正義に『尚書』を引いて云ふ、「周公將に禮樂を作らんとし、之れに優游すること三年なるも、作る能はず。君子、其の言を恥づかしむれば、而（すなは）ち従はれず、其の行ひを恥づかしむれば、而ち隨はれず。將に大作せんとして、天下の我を知る莫きを恐るるなり。將に小作せんとして、父祖の功業・徳沢の揚がらざるを恐る。然る後に洛を営みて以て天下の心を觀る。是に于いて四方の諸侯其の群黨を率ゐて、各々位を其の庭に攻（をさ）む。周公曰く、『之れに示すに力役を以てしてすら且つ猶は至る、況や之れを導くに禮樂を以てするをや』と。然る後に敢へて禮樂を作る。『書』（康誥）に曰く、『新大邑を東國の洛に作り、四方の民、大いに和會す』とは、此れを之れ謂ふ。」と。

〈本文〉 其の治まる時に應じて、禮を制し樂を作りて、以て之れを成す。成るとは、本末實文皆以（すで）に具はるなり。

〈義証〉『以』、『已』と同じ。『禮記』樂記に、「王者の功成りて樂を作り、治定まりて禮を制す」と。『白虎通』禮樂篇に、「樂には、『作』

と言ひ、礼には『制』と言ふは何ぞ。樂は陽なり。動いて倡始を作す、故に『作』と言ふ。礼は陰なり。繋けて陽に制せらる、故に『制』と言ふ。樂は陽に象るなり。礼は陰に法るなり。

《本文》是の故に樂を作る者は、必ず天下の始めて己を樂しむ所に反りて、以て本と爲す。舜の時、民は其の堯の業を明らかにするを樂しむなり。故に韶なり。韶は韶なり。

《義証》沈欽韓云ふ、「此れ、大司樂注と義略ほ同じ。然れども彼れ『韶』を『紹』に作る。他処も亦『紹』の字多し」と。與案ずるに、『白虎通』礼樂篇に、「舜を『簫韶』と曰ふは、舜能く堯の道を繼げばなり」と。『漢書』礼樂志に、「舜、招を作る」と。招は堯を繼ぐなり。繼も亦紹の義なり。此に「韶」に作るは異文と爲す。

《本文》禹の時の民、其の三聖の相繼ぐを樂しむ、故に夏なり。夏は大なり。

《義証》『漢書』礼樂志に、「夏は大いに三帝を承くるなり。『白虎通』(礼樂篇)に、「禹を『大夏』と曰ふなり」と。『御覽』、『元命苞』を引いて云ふ、「禹の時の民、大いに其の三聖相繼ぐに駢(なら)ぶを樂しむ。故に夏は大なり」と。

《本文》湯の時の民、其の之れを患害より救ふを樂しむなり。故に護なり。護とは救ふなり。

《義証》盧云ふ、「救之、疑ふらくは當に『救己』に作るべし」と。與案するに、『御覽』、『元命苞』を引いて云ふ、「湯の時、民大いに其の之れを患害より救ふを樂しむ。故に樂を『大護』と名づけて之れを作る」と。文義自順なり。『漢書』礼樂志に、「護は民を救ふを言ふなり」と。『白虎通』(礼樂篇)に、「湯、衰を承げ能く民の急を護るを言ふ」と。『護』『濩』同字なり。

《本文》文王の時、民其の師を興して征伐するを樂しむなり。故に武なり。武は伐なり。

《義証》春秋の今文家、文王を以て受命の王と爲す。故に征伐・作樂を以て並んで之れに帰す。『大戴禮』少間篇に、「乃ち崇許魏を退伐して、以て天子に客事し、文王卒して、天命を受け、物を作りて天に配す」と。『尚書大傳』に、「文王の六年、崇を伐ち王を称す」と。『春秋元命苞』に、「西伯既に丹書を得。是に於いて王を称して正朔を改め、崇侯虎を誅す」と。後漢の伏湛の上疏に云ふ、「文王命を受けて五國を征伐す」と。『荀子』儒效篇に、「武王、紂を誅して天下を合して、聲樂を立つ。是に於いて武象起こりて韶濩廃る」と。是れ荀子、武象を以て並んで武王の作と爲す。案ずるに本書三代改制篇に亦云ふ、「文王、武樂を作り、武王、象樂を作る」と。董直ちに武を以て文王の樂名と爲し、荀と異なる。『漢書』礼樂志に、「武王、武を作り、周公、勺を作る。勺は能く先祖の道を勺(く)むを言ふなり。武は武功を以て天下を定むるを言ふなり」と。未だ嘗て文王に樂有るを言はず。周頌序に、「維清は象武を奏す」と。箋に云ふ、「兵を用ひて時に刺伐するに象るの舞なり。武王焉れを制す」

と。正義に云ふ、「文王の時、撃刺の法有り。武王樂を作り、象りて舞を為す。其の樂を号して『象武』と曰ふ」と。『左（伝）』襄二十九年伝に、「象箏・南箏を舞ふを見る」と。杜注に、「皆文王の樂なり。大武は武王の樂なり」と。服虔云ふ、「象は文王の樂、象舞なり」と。『史記』注に引きし賈逵の説同じ。劉敞云ふ、「象は則ち文王の樂なり。所謂る象箏なる者は、蓋し文の舞なり。故に其の辭に文王の典と稱す。服・杜の注に拠れば、則ち古文家も亦以爲らく、文王の時に樂有りと。但、武を以て文王の樂名と爲さず。

〈本文〉四者、天下同じく之を樂しむこと一なり。

〈義証〉○官本に云ふ、『同樂之』、他本『之樂同』に作る」と。

〈本文〉其の樂しみを同じくする所の端は一なる可からざるなり。

〈義証〉隱五年何注に、「王者、治定まりて礼を制し、功成りて樂を作る。未だ制作せざる時は、先王の礼樂の今に宜しき者を取つて之れを用ふ。堯を『大章』と曰ひ、舜を『箏韶』と曰ひ、夏を『大夏』と曰ひ、殷を『大護』と曰ひ、周を『大武』と曰ふ。各々其の時の民の樂しむ所の者に取りて之れに名づく。舜の時の民は、其の道の章明なるを樂しむなり。舜の時の民は、其の堯の道を修紹するを樂しむなり。夏の時の民は、其の三聖相受くるを大とするを樂しむ。

殷の時の民は、其の己を護るを大とするを樂しむ。周の時の民は、其の紂を伐つを樂しむなり。蓋し号を異にするも、而かも意を同じくす。歌を異にして、而かも帰を同じくす」と。此の文に本づきて

更に堯に及ぶに似たり。凌云ふ、『王者は虚しく樂を作らず』より此に至るまで、亦『元命包』に見ゆ」と。

〈本文〉樂を作るの法は、必ず本の樂しむ所に反る。樂しむ所、事を同じくせざれば、樂安くんぞ世々異ならざるを得ん。是の故に舜韶を作りて、禹、夏を作り、湯、護を作りて文王、武を作る。四樂名を異にするは、則ち各々其の民の始めて己に樂しむに順へばなり。

〈義証〉凌云ふ、『史記』に、「功、名と偕にす」と。正義に、「名は、樂名を謂ふなり。功は揖讓、干戈の功なり。聖王の制樂の名、建つる所の功と俱に作るなり。○官本に云ふ、『四樂』、他本『四代』に作る」と。

〈本文〉吾其の效を見る。『詩』に云ふ、「文王命を受け、此の武功有り、既に崇を伐ち、邑を豊に作る」と。之れが風を樂しむなり。

〈義証〉文王の崇を伐つ、漢儒推して周時の征伐の始めと爲す。本書両び其の詩を引く。漢の敞助の伝に、「淮南王安謝して曰く、『湯、桀を伐ち、文王崇を伐つと雖も、誠に此れに過ぎず』」と。凌云ふ、『釈文』に、『風は是れ諸侯の政教の天下を風する所以なり』と。『論語』（顔淵篇）に、「君子の徳は風なり」と。並んで是れ此の義なり」と。

〈本文〉又曰く、『王、赫として斯くに怒り、爰に、其の旅を整ふ。是の時に当たり、紂無道を爲し、諸侯大いに乱る。民、文王の怒るを樂しみて、之れを詠歌するなり。周人の徳、已に天下に洽（あ

まねし)

《義証》盧云ふ、「人の字、疑ふらくは、衍ならん」と。

《本文》本に反りて以て樂を為(つく)り、之れを大武と謂ふ。民の始めて楽しむ所の者は武なるを言ふのみ。

《義証》『白虎通』礼楽篇に、「詩人之れを歌ひて曰く、『王赫として斯に怒り、爰に其の軍旅を整ふ』と。此の時に当たりて、文王之怒りて以て天下を定むるを樂しむなり。故に其の武を樂しむなり。周室、中ほどに象樂を制するは何ぞ。殷紂、惡を為すこと日久し。其の惡最も甚だし。渉れるを斷(き)り、胎を句し、天下を殘賊す。武王兵を起(こ)して、前に歌ひ後に舞ふ。殷に剋つの後、民人大いに喜ぶ。故に中ほどに作る。喜びの盛んなるを節する所以なり」と。

又云ふ、「周公を『酌』と曰ひ、武王を『象』と曰ひ、合して『大武』と曰ふは、天下始めて周の征伐して武を行ふを樂しむなり」と。此れに拠れば則ち董、武を以て文王の作と爲し、大武を以て武王の作と爲す。『礼』明堂位に、「冕して大武を舞ふ」と。内則に、「勺を舞ひ、象を舞ふ」と。洵・酌・象、並んで三代改制篇に見ゆるも、別到大武の名無し。当に是れ勺・象を以て合して大武と名づくるなるべし。『白虎通』の説と同じ。

《本文》故に凡そ樂なる者は、之れを終はりに作りて之れに名づくるに始めを以てす。本を重んずる義なり。

《義証》『漢書』礼樂志に、「高祖の廟には、武德・文始・五行の舞を奏し、孝文の廟には、昭德・文始・四時・五行の舞を奏し、孝武の廟には、武德・文始・四時・五行の舞を奏す。武德の舞は、高祖の四年に作る。以て天下に樂已に行はれ、武已に亂を除くに象る。文始の舞は、舜の招の舞に本づくなり。高祖の六年名を更めて文始と曰ひ、以て相襲はざるを示すなり。五行の舞は、周の舞に基づく。秦始皇二十六年名を更めて五行と曰ふなり。四時の舞は孝文の作る所、以て明らかに天下の安和を示すなり。蓋し樂己の自ら作る所を樂しみ、制有るを明らかにするなり。先王の樂を樂しみ法有るを明らかにするなり」と。董の此の論に拠れば、當時更めて樂舞を制するを以て全ての名を易ふるは、本を重んずるの義に非ざるに似たり。

《本文》此れに由りて之れを觀れば、正朔・服色の改は、命を受けて天に應ずるなり。制礼・作樂の異は、人の動なり。二者は離れて復た合す。一を為す所なり。

《義証》正朔を改め服色を易ふること、先に在り、礼樂制作、後に在り。時を同じくせずと雖も、而も同じく朔(創)垂に歸す。故に曰く、「離れて復た合す」と。天に應じ人に順ふ所為(ゆゑん)の意は、一なり。錢云ふ、「何氏の三科九旨の説は實に仲舒に本づく。此に已に二科六旨を得、尚ほ一科三旨の王道篇に見ゆる有り。或ひは宜しく此に有るべきならん」と。與案するに、何氏の九科三旨に所謂「張三世」は、此の篇に見ゆ。「通三統」は三代改制篇に見ゆ。「異内外」は王道篇に見ゆ。然れども董自ら六科十指有りて、何

(休) 自ら胡母生の条例を用ふと言ふ、或ひは必ずしも尽くは同じからざらん。

《本文通釈》春秋の道は天を奉じ、古に法る。ところで、たとえ優れた腕を持っても、定規、コンパスに従わなければ、四角形や円形を正しく描くことはできないし、たとえよい耳を持っても、六律を吹かなければ、五音階を確定することはできない。たとえ、智力すぐれた心を持っても、先王を観察するのでなければ、天下を平和にすることはできない。つまり、先王の遺した道は、天下の(治世の)規矩であり、六律である。故に聖人は天に法り、賢者は聖人に法る。これ(聖人、賢者の法るもの)が、(天下の)大数であり、この大数を得れば治まり、大数を失えば乱れる。これが治乱の分かれ道である。聞くところでは、天下に二道はない。そこで聖人は政治(の外面的方法)は異にするが、(基づく)根本の道理は同じである。(また)古今は(道が)一貫して通じている。そこで先代の賢者は、範を後世に伝えるのである。春秋は政事に關しては、古に復歸したものを善とし、常法を變易したものを譏る。これは先王に法ろうとしたものである。

偏見を抱く者が、この理屈を受け取つて言う。昔から、かりに先王の道に従うべきであるならば、どうして(これまで各王朝は前王朝に)準拠しないのであろうか、と。世人はこの言葉に迷い、聞いて正道を疑い、邪言を信じてしまう。甚だ憂うべきことである。これに答える。「諸侯は狸首の樂に射る」という詩を聞いた人があつて、その言葉通り、狸の首を断つてそれを木に掛けて射て、「こんなことがどうして音楽の中に入ろうか」と言つたとすれば、このひと

は名を聞いて実を知らない者である。さて今、いわゆる「新王は必ず制度を改める」というのは、道を改めるのでもなければ、理を變えるわけでもない。(新王は)天より命を受け、姓を易えて、王の地位を交替したのであつて、前王を承け繼いで王となるのではない。もしすつかり前王朝の制度に依拠してしまい、古い政治のやり方を修め、何も改めることがないというのであれば、これは前王の跡を繼いで王となる者との何の区別もない。受命の君主は天が大いに顕彰する。そもそも父に仕える者は父の意向を身に受け、君に任える者は君の志を表すものである。天に仕えることも同様、今、天が大いに己を顕彰しようとするのであるから、制度が、代つた前王朝のものをそのまま受け繼いで、ほぼ両者同じなのであれば、何も明らかなることがなく、これでは天の志に合わない。故に(新王が)居所を移し、王朝の名号を變更し、曆を改め服色を變えるのは、他でもない、天の志に順つて自らを表さないわけにいかないものであるからである。かの(道の)大綱・人倫・道理・政治・教化・習俗・文義となれば、尽く元のままである。復たどうして改めよう。こういうわけで、王者は形式上、制度を改めることはあつても、實質において道を変易することはない。

孔子が「無為にして治まつたのは、舜であらうか」と言つたのは、舜が堯の道を主としたことを述べたのである。これ(無為の治)は、道を変易しなかつたことの効力ではなからうか。

問う者が言う。制度が改まれば、天が(命を)授けたことは明らかとなる。それでは(新王が)必ず新たに音楽を作るのはなぜであらうか、と。これに答える。音楽は制度と異なる。制度は天に應じて改めるが、音楽は人に應じて作るものである。かの天命を受けた

者は、必ず人々が（その人と）楽しみをともにするものである。こ
ういうわけで、（受命の）当初、大いに制度を改めるのは、それによつ
て天命（が我に降ったこと）を明らかにするのあり、（王朝の樹立完
成の）最後（の段階）に音楽を新たに作るのは、それによつて天の
功德を世に示すのである。天下の人々の（新王朝の下で）新たに見
い出した楽しみに従つて新王朝の音曲を作り、これを通じ一方で政
治を調和し、また一方で（世の人々の）徳を盛んにするのである。
（しかし）天下があまねく平和にならなければ、王者はむやみに音
楽を作ることをしてしない。音楽なるものは、内部に満ちあふれ、外に
動き出し発現するものである。（新王によつて）平和が実現した時（の
世情）に応じて、礼を制定し音楽を作り、（新王朝の樹立を）完成さ
せる。完成させるとは、（王朝としての）根本的の事柄も枝葉の些事
も、文も質も具備しおわつてゐることである。そこで、音楽を作る
者（新王）は必ず天下の人々が、始めて自己（のどの点）に楽しみ
を覚えたか、そのところまで反求し、それを作樂の基本とする。（た
とえば）舜の時、民は舜が堯の功業を世に昭らかにしたことを楽し
んだ。故に（舜の音楽を）韶というのである。（つまり）韶は韶とい
う意味である。禹の時、民は（堯・舜・禹の）三聖人が続けて王の
位を継いだことを楽しんだ。そこで（禹の音楽は）夏というのであ
る。夏とは大という意味である。湯の時、民は湯が民を患いから救つ
たことを楽しんだ。そこでその音楽を護というのである。護とは救
うという意味である。文王の時、民は文王が軍隊を興して征伐した
ことを楽しんだ。故にその音楽を武というのである。武とは伐とい
う意味である。この四者は天下がみなともに彼ら（の功業）を楽し
んだという点では同様であるが、民がともに楽しんだその発端（と

なる四王の功業）は、同じではない。

音楽を作る方法は必ず（民が王朝樹立の当初）元來何を楽しんだ
かという問題に立ち返る。楽しみの対象となるものが同じでなけれ
ば、音楽は時代によつて必ず異なることになる。この故に、舜は韶
を作り、禹は夏を作り、湯は護を作り、文王は武を作ったのである。
この四つの音楽が、名を異にしているのは、各王の民が王朝樹立当
初、各王自身の何を楽しんだかに順つてゐる。私はこれによつて王
者の功德を見るのである。『詩経』（大雅・文王有聲）に言う。

「文王が命を受けるや、かくまでに武功を立てた。崇を伐った後は、
まちを豊の地に作った」と。これは（文王の）徳化を楽しんだもの
である。また（大雅・皇矣）に言う。「王は大いに怒り、軍隊を整え
た」と。この時、殷の紂王が無道な振る舞いをなし、諸侯は大いに
乱れた。（そこで）民は文王の怒りを喜びこの歌を歌つたのである。
周人の徳が、天下にあまねく行きわたると、人々はこの（周王朝の）
根本（の精神）に立ち返つて音楽を作り、これを大武と呼んだ。こ
れは民が（王朝樹立の）当初に初めて楽しんだものが、武功であつ
たことを示している。

故にすべて音楽というものは、（王朝樹立の完成の）最後（の段階）
に作つて、それに名づけるには、（王朝樹立）当初（の精神）を以て
する。これは根本を重んずる意義からである。以上のことから見て
みると、曆法や服色を（王朝毎に）改めるのは、天命を受け天意に
応じるためであり、礼樂の制作を（王朝毎に）異にして行ふのは、
人心の動向に従うためである。これらのことは（時間的には前後に）
かけ離れてはいるが、（いずれも王者の創業の精神に）合致するので
あり、この点に（これらの事柄はすべて）帰一するのである。